

案 件：第1回お互いさまのまちづくり協議会 議事録

日 時	令和4年7月12日（火）午前10時～午前11時30分
場 所	豊橋市役所 東館8階 東82会議室
参 加 者	委員 13名 アドバイザー 1名 事務局 長寿介護課

1 議事

(1) 令和4年度の委員等について

- ・今年度新任の委員を紹介

(2) コロナ禍における支え合い活動団体 活動継続の手引きの公開について

- ・事務局より説明

(3) 議事

お互いさまのまちづくり協議会での多世代交流に関する議論の実施について

- ・事務局より説明

— 意見 —

- ・委員 : 愛知大学には、授業とは関係のない地域貢献事業がある。高齢者向けのボランティア団体も一つあり、多世代交流検討会への参加はその団体に頼む。子ども向けのボランティアは多いが、高齢者向けは少ないという現実がある。
- ・委員 : 豊橋市では部活がなくなり、のびるん de スクールはサポーターとしてシルバー世代が関わっている。普段の生活から子どもたちと関わっていかなければいけない。多世代交流検討会で若者に何か気付きを得てほしい。空き家問題など、今後考えていかなければならない問題もある。
- ・委員 : 最近、自治会に加入しない方が増加している。そのため、近隣の交流が希薄になっている。普段から挨拶をしている地域は災害の時に強いと感じる。自治会への加入率が増加してほしい。助け合いは現実的にできていないと感じるが、校区ごとにある成人式はコロナ禍でも中止とならず実行できた。
- ・委員 : シルバー人材センターでは、のびるん de スクールに派遣事業をしている。この取り組みは若者と高齢者の接点が自然にできる。
- ・委員 : 若い頃に頼り合いができなければ、高齢になってもできないと思う。学生の頃から助け合いを経験することが大切である。高齢者との交流となると、特別なことを考えがちだが、高齢者は特別なことを望んでいるわけではなく、話を聞く、スマホの使い方を教えるなどで関わりを持てると思う。特別なことはしなくても、“あなたは役に立つ”という経験を学生にしてほしい。仕事って何だろう？のまま就職している人が多いように思う。アルバイトもコロナ禍で見つかりにくい。役に立ったことでお金が出る仕組みがあるとよい。学生も嬉しいと思う。
- ・委員 : それぞれの世代で居場所があると思うが、地域でやっている居場所を把握して、うまくコーディネートできれば多世代交流ができると思う。
- ・委員 : 大学にはラーニングcommonsがある。そのような場所が地域にあると良い。

- 委員 : 子どもとの交流を考えていきたいという居場所の活動者は増えていると思う。地域の40代、50代の方からも居場所の立ち上げの相談もあり、若い世代でも考えている人は多くなっているのではないか。
- 委員 : コロナ禍前の話だが、自分が運営している居場所に隣の大学生が来て交流していた。若い人の考えを知ることができるので、皆さん元気になって、とても有効であった。若い人を巻き込む多世代交流は非常に良い。
- 委員 : 自分の運営する居場所は、初期のころ「赤ちゃんからどなたでも」ということで3歳くらいの子も来ていた。しかし、保育園に入ってから来なくなってしまい、高齢者中心になってしまった。どのような形で運営すれば多世代交流になるか、真剣に考えなければいけないと思った。
- 委員 : 大村地区では、園芸をきっかけに多世代交流をしたことがある。さわらび会では子どもと高齢者の居場所があるが、高齢者の施設にはインフルエンザの時期は子どもが入れない。コロナ禍でも同様である。近くの公園などで行ったが、子どもに参加してもらうのが難しい。高齢者もコロナの感染が怖く、今は難しいと感じる。勉強をしたり、料理をしたりするのが子どもにとって一番身近ではないか。子どもと高齢者を繋ぐために学生がキーマンになっている。児童館などでゲームなどの交流ができるといいと思う。
- 委員 : 理想は、子育て、高齢、障害などのワードがない居場所。高齢者と子育て世代と一緒に交わることが少ないのは、都合の良い場所と時間が合わないからではないか。地元や近所に居場所があると近いので行きやすい。
- 委員 : 近年は老人クラブも減少している。自分の住む地域では、畑で芋やスイカなどを作ったり、草取りを行う三世代交流を行っている。子どもは、印象に残る仕事をすると覚えていてくれて、大きくなって挨拶をしてくれる。
- 委員 : 他の地域との交流ではなく、同じ地域での交流がよいと言われることがある。同じ地域同士の試みがあると良い。
- 事務局 : 若者にその交流はどのようなものかいいかを多世代交流検討会で考えてもらいたい。
- 委員 : 継続性でいうとサークル・ゼミも良いが、どのように地域の人を巻き込むか学生に考えてもらうと良いと思う。
- 委員 : つつじが丘では、小学校の子どもに来てもらって居場所活動が行われている場所があるが、核家族化が進んでいたり、小学校の先生のなかで温度差があったり、時間が合わなかったりなど問題点は多い。多世代交流検討会については、結果が出ることを難しいと考え、何も出ないことを前提に実施すべき。大学生の得意なものや、関連するものなら積極的に来てくれるのではないか。SNSでのスタートアップなどを市がフォローする形も面白い。高齢者に興味のない学生が関わってくれるような取り組みがあれば良い。
- アドバイザー : 多世代交流検討会で何かを生み出そうとすることや、着地点をあえて設けることはやめた方が良い。一緒に何かできればいいなというぐらいの気持ちでやった方が良い。まずはやってみることが大切。また、意見を聞くために相手方を会議に呼ぶばかりでなく、学校など意見を聞きたい相手の方へ自分たちが出向くことも大切である。高齢者はお世話をしてほしいとは思っていない。したがって高齢者の世話をお願いするというスタンスは良くない。若者と高齢者にはそこに考えの違いや温度差があるため、意識の変換と、お互いに歩み寄らないと交流は難しい。また、元気な高齢者は生涯学習の分野で活躍している。そういう高齢者を取り込むことも重要。豊川市では、「結ネット」という取り組みがある(電子回覧板など)。地域で支え合わなければいけないということをみんなが理解していないように思う。児童館は生まれてから高校生までという定義であるため、豊川市は

児童館で多世代交流ができる。豊橋市は児童館が少ないため、交流が少ないという実態もある。

- 委員 : 豊川市の「結ネット」のようにICT化も重要である。技科大では、市と連携してアプリ開発が行われている。
- アドバイザー : ある大型店舗で、選挙に行った証明書を持っていくとお菓子をもらうことができるという取り組みがあった。このように企業の協賛を得て、参加した人にお菓子など何かしらの還元をするなど、楽しくいろいろな層を取り込むような考え方も必要だと考える。
- 委員 : 岩田校区では、デジタル回覧を検討する予定である。自治会が理解しないと、地域と子どもたちがうまく繋がっていかない。高齢者が増えて誰がサポートしてくれるかは重要な問題である。
- 委員 : 身近なお祭りなどで多世代交流があれば良いが、今はコミュニティそのものの立て直しが必要と考える。老年女性の貧困や孤立の問題もある。回覧板が回ることで見守りになっているように感じるが、オンラインになるとその点はどうか。
- アドバイザー : 「結ネット」は、投稿者は誰が閲覧したかわかるような仕組みになっており、見守りにも繋がる。
- 委員 : 多世代交流検討会が、この協議会の趣旨と整合しているか。
- 事務局 : 多世代交流検討会をきっかけに、徐々に少子高齢化について考える世代を広げていくようなイメージ。
- 委員 : 今までは高齢者だけで様々な問題を考えていた。多世代交流検討会で、世代が広がっていけば嬉しい。

### 3 その他

- 令和4年度 第2回協議会  
令和4年12月8日(木) 10時00分～